

解説・詩人論

「乳粥の味」

「朝倉宏哉さんの血脈の床しさ——」ファンからの証言」

「朝倉宏哉・初期詩集を読む」

日原正彦

大掛史子

相沢史郎

乳粥の味

日原正彦

朝倉さんから詩集を贈呈していただくようになったのは、確か第四詩集の『満月の馬』あたりからではなかったかと思う。その時の解説を西一知氏が書いていて、その中で朝倉さんの詩の特徴を「シンプルで直截」と評していたが、今回第一詩集から第六詩集、そして未収録詩篇に至るまでの、選詩群を読んでみて、改めて、特にその「直截」さが一貫していることを感じた。朝倉さんの詩には曖昧にぼかして、何かがあるように見せかけるような、ある意味、姑息な方法意識は微塵もない。まっすぐに感受した思いを正直に、熱く語りかける直叙体的な方法に貫かれている。だから読者は、身構えたり、腹をさぐったりというような「用意」はいらない。ただ彼の語りかける嘘のないことばの熱量に浸ればよいのである。もちろんその素材はさまざまである。故郷など日本の

地誌、民俗、自然、に関わるもの。世界のいろいろな民族の生活や文化、自然に関わるもの。それと関連した、戦争や圧政、飢餓、病気や貧困などの社会問題に関わるもの。あるいは、虫や鳥や小動物などの生きもの、また花や樹などの植物の生へ注がれたまなざしに関わるもの。そしてまた、父や母、兄弟、家族、友人などの人間関係へ注がれるまなざしに関するものなど。その素材において多様性はあっても、その語りかけの直截さは一貫している。そしてまたそのように一貫した語りかけで彼が一篇の詩にこめたテーマ、思想もまた一貫しているのである。

それをひとことでは、人間を含めた生きものいのちのさまざまありようへの深い愛おしみと、そんな個々の生の自由を否定する大きな力（それはあらゆる生きものの甘受せねばならない死の宿命ということから、人為的な悪意による圧殺の悲劇までさまざまであるが）に対する深い悲しみの情と熱い憤りである。

そこで、この解説では朝倉さんの六冊の詩集からそれぞれ一篇ずつ選んで、それらの主題について述べてい

うと思う。

第一詩集『盲導犬』から「お祭り」。

「さびしければさびしいほど／華やかなお祭りが欲しい」「僕」は笛や太鼓に誘われて広場に行き、そこで「だれだかわからない」人たちとひとときを過ごし帰るのだが、その時「いままでやっとこらえていた涙が／どつとあふれて／たちまち視界を失くしてしまふ」。「どうしてだか僕にはわからない」と書いているが、実は無意識にはわかつているのだ。それは、生きもののいのちそれ自体が生と死のお祭りだからだ。そしてそれは民族の血脈の中に連綿と受け継がれてきた儀式。「そのたびに血は蘇り／ひとたちはしばらくの間 死をわすれた」。だが祭りは生のためのものでいいのではない。「しかし ひとが死ぬと／生き残った者たちは黒い服をきてお祭りをする」。「ひとが死ぬとひとが生まれ／お祭りがおむると／すぐ次のお祭りがはじまる」。生は死のための祭り、死もまた生のための祭りなのだ。「僕」の目からあふれる涙の理由はそこにある。「僕」は生を得た日から「僕」といういのちの祭りの祭司であり続けてきた。「そうし

て石になる日まで／僕はたぶん 実に熱心な祭司だろう」。「石」とはもちろん「死」の暗喩であるが、ここで「僕」は生きている限り、死の祭りがたとえ避け難く「僕」に巢食ついているとしても、それを強く否定するのだ。僕の目にあふれた熱い涙はそんな否定の証なのである。

僕がきょうひそかにむかえるお祭りは
僕がきょう生きている証だ
僕の血があまり赤いから
僕の血があまりうつくから
お祭りは僕のほかで華やかにすすむ

そしてそれは、いのちといのちの結び合う「愛」の証でもある。

だれかが僕のためにやってきて
僕と抱き合う
その誰なのかわからない優しい影とふたりで
笛や太鼓や唄をきいている

第二詩集『カッコウが吃っている』から「八月十五日 胆沢川で」。

朝倉さんの、敗戦とそれに連なる体験の詩は、この選詩集のあちこちに見られるが、この詩は戦後三十年を経た八月十五日に、故郷の胆沢川へ七歳の息子を連れて訪れ、やはり三十年前に七歳だった自分をふりかえりながら書かれた詩である。魚獲りに夢中になっている息子の上空を一羽のトンビが巡回する。

低空巡回する一羽のトンビ
あまりにも低空すぎる
逆光のなかで眼が光る
（息子が襲われる！）
だが、心配はご無用だ
トンビは魚を狙っている

目の前のこんな光景が、詩人の心の中で三十年前の七歳の自分の姿と重なる。蟬しぐれの降りそそぐ中、赤禪

姿で遊んでいた「おれたち」は絶えず敵機の来襲におびえていた。日本のあちこちの上空を「低空巡回」していただるう敵機。それが眼前の上空を巡回しているトンビの影と重なる。あの日「敵機は来襲しなかった／川は原形をどどめていた」が「終戦をしらないおれたちは／いつでも声を殺して／逃げる姿勢で遊んでいた」のだ。ぎらぎらと照りつける八月十五日の太陽の、そのまばゆさとは裏腹の暗い不安が「おれたち」の心のどこかに影を落としていた。今低空飛行しているのは敵機ではなく一羽の魚を狙うトンビである。だがそのトンビが再び黒い死の機影となって巡回する日が来ないと、だれが断言できよう。詩人は息子に問いかける。

息子よ
おまえの裸形に
あの日のおれを重ね得るか
三十年 一万九百五十日かなたの
葛の生い繁る胆沢川の透明な水のなかの
イガダグリの赤禪のおどおどした瘦せた子を

おまえの裸形に重ね得るか

第三詩集『フクロウの卵』から「かなしみ」。

秋の朝のかなしみか

私に訪れなくなつたのは
いつからだろう

第一連である。秋は生命力にあふれた夏の余韻と万象の衰えてゆく冬への予感がひとつに溶けこんだ季節である。それゆえ秋の空の色や風の音などは、生の輝きと死の暗さとが合わせ鏡になつたような不思議な深みを感じさせる。詩人はその深みに一瞬浸された時の感慨を「かなしみ」ととらえているのだ。

栗の実が落ちる音で

目覚める朝は

あいつは

すばやく私を捉える

ここには秋という時空の感受に基づいた、直截ないのちへの愛おしみと死の悲哀の感情が深々と流れている。

第四詩集『満月の馬』から「満月の馬」。

最初にも述べたように朝倉さんの詩は総じて、いのちある全てのものへのほめうた、悲歌、挽歌となつていますが、この詩はその背後にあつて、あらゆるものの生と死を統べる超越的な一者のまなざしに浸され、その「宿命」を甘受するいのちのありようが、象徴絵画的な手法で描かれている秀作である。あるペンションの女主が、引退した牝の競走馬を引き取り、裏山に放し飼いにしている。今ではもう二十歳の老馬である。女主は語る。

わたしの馬は

満月の夜は眠りません

詩人たちが昼間訪れた八ヶ岳山麓は、桜、桃、木蓮、辛夷、連翹などの花盛り、中でも圧巻は「樹齢三百五十年」の「縄文の火炎土器のよう」な糸桜だった。その

私は私のなかではじまる潮の満ち引きに
身をゆだね

あいつが去るのを待っている

「あいつ」とはもちろん「かなしみ」のことである。それは生と死の、寄せては返す潮騒のように詩人の体内にこだまするのだ。そのような一瞬、時の浜辺にうちあげられたような一瞬に身をゆだねて、詩人は永遠の声を聞く。そしてわれに返るのをじっと待つのだ。「どこかでコスモスの香りがして／蝶が舞いあがる／そのかすかな羽音がきこえる朝」も「鳥影が障子をよぎ」り「朝のきらめきのなかで果実が熟」し「コオロギが銀色の卵を生む」時も「あいつは襲ってくる」。

せつなく いじらしいあいつ

つつましく しなやかなあいつ

はげしく ひそかなあいつ

あたたかく むなしいあいつ

花々の精に囲まれた高原に満月の夜が来ると、

ほら 聞こえるでしょう

馬の足音が

さびしくもリズムミカルな足音が

満月が出たのですよ

大きな辛夷の木の周りを老馬は黙って脇目もふらず、ただただぐるぐると廻っているのだ。

花越しの満月が

一馬のからだにゆらゆらゆれる

うるんだ瞳にきらきらひかる

むせるような花の香りの中で、まるで満月に操られているかのようにいつまでも回り続ける老馬。超越的なものの黄金のまなざし（満月）に晒されてあるいは生きとし生けるものの魂の輪廻の舞台を舞い巡るのか、と思われするような幻想を顕現させる作品になつている。

わたしの馬が死ぬのは
満月の夜でしょう
きつと 今夜のような――

第五詩集『獅子座流星群』から「ああ」。

朝倉さんの詩のテーマの一貫性については前に述べたとおりだが、それらをどのように書き表すかという方法論（詩論）を書いた詩も、この詩選集には散見する。この詩集でも「あやとり」や「長距離ランナー」などその類であるが、ここでは「ああ」をとりあげよう。

おまえの詩に

ともすると顔を出そうとする

「ああ」を叩け

感嘆詞を呑み込め

詠嘆法を吐き捨てよ

このように詩は始まるが、「ああ」は朝倉さんの直截

な語法にとつては、熱い感受をほとばしらせるための核

ともなるものである。だがその「ああ」を「ああ」のままに吐き出せばかえってその直截な明晰さが叫びの裏に掻き消されてしまう。「ああ」は心に「夏草のようにはびこっている」。そしてそれは「きょうの世界に頻発」し「あすの地球に予兆され」「歴史の頁に充滿している」が、むなしく吐き出されるままに「色褪せてしおれている」草だ。だからこそ「ああ」は無言の中に呑み込んでしまわなければならない。つまりそれは一度殺された後に、沈黙の肥やしの中から新たに芽生えなければならぬのだ。彼は自身に言い聞かせる。「一編の詩に／「ああ」と書くならば／覚悟せよ／「ああ」に殉死して／蘇りをはかれ／蛹のようにひたぶるに沈黙し／蝶のように祈りつづけよ／しかるのち／鮮やかな復活を遂げよ」と。その時こそ

おまえの詩の言葉たちは

根元を掘り起こされて

水を注がれ

気韻に満ちて響き合う

これが朝倉さんの求め続ける詩法である。

第六詩集『乳粥』から「乳粥」。

この詩選集には朝倉さんが仕事上の取材旅行（あるいは個人的な旅もあったかもしれないが）で訪れた世界各地、とりわけ中国、インド、ヒマラヤ、アフリカなどでまのあたりにした自然、民俗、人間の生活、そしてぶつかった悲惨な事件などを素材に書かれた詩が多くあるが、この詩はそれらの中でも傑作の一つである。

この端正に書かれた散文詩について、くどくどと解説する要はないかもしれない。彼の語りかけるものに素直な耳をすませばよい。そこには前に述べた朝倉さんの「あ

あ」を呑み込んだ無言の中から静かに語り出された詩法が感じられるだろう。北インドの山上の寺院で、少年ラマ僧が詩人のためのひらに直接よそってくれた「ヒマラヤのようにまぶし」い乳粥。それは直截にさしだされたことばにも似て、ある象徴的な意味合いをこめて語り出さ

れる。ラマ僧たちのお経に静かに耳を傾けるチベット人たち。彼らは皆「中国の侵略と弾圧で信仰と誇り以外のすべてを捨ててダライ・ラマとともに雪のヒマラヤを越えてきた難民とその子孫である」。お経が終わって彼らがラマ僧たちから頂く一椀の乳粥は、彼らのいのちそのもの、それは圧政と弾圧を乗り越えいつの日か祖国をとりもどさんとする祈りのシンボルである。そしてそれはまた二五百年前、ブッダ・ゴータマが苦行の後に少女スジャーターによって捧げられた乳粥でもあるのだ。「悠久の今を共有しながら乳粥を味わうかれらの眼前にヒマラヤが聳え立つ」。「あなたもどうぞ」と媪から勧められた乳粥。遙かな時を越えて、ブッダの心、少女スジャーターの心、そして目の前のラマ僧やチベット人たちの心、

更に日本人朝倉宏哉の心が「乳粥」を通して今まさに一つになる。

わたしはまぶしさを口に入れた 温かかった 質素
だった 喉元を通るとき かすかにスジャーターの乳

粥の味がした

この詩が単なることばだけの反戦、反抑圧、反文明の詩になっていないのは、一椀の乳粥の素朴な味わいの中に、人間の賢しらがひきおこすあらゆる業苦からの完全な救済を見出そうとしている点にある。人類の未来、人間の魂を救い得るものは、このような一椀の乳粥の素朴な味わいではないか、そこに滲み出す嘘のない愛ではないか、ということにまでも、思いを至らせる点にあるのである。

最後に、ここでは紹介できなかったが、亡き父や母への鎮魂の詩、友人たちや飼い犬の思い出や死を悼む詩などにも心うつものがあることを付記してこの拙い解説を終えたいと思う。

朝倉宏哉さんの血脈の床しさ

——ファンからの証言

大掛史子

朝倉宏哉さんは、詩を書く女性たちに変人気がある。作品にまず惹き寄せられ、惚れ込んだ朝倉ファンたちは、お会いして交流を持つと、さらに好感度のボルテージを上げていく。なぜか。朝倉さんが、物静かで礼節を知る本物の紳士だからであるの言うまでもない。まず彼は含羞の人である。周囲への細かい配慮を欠かさず、時には激しい闘志の炎も見せるが、知的なユーモアのセンスでその場の空気を柔らげる。

市民ランナーでもある。余りそれをひけらかさないが、年に数回あちこちの名だたるマラソン大会に参加して、いつも上位で完走している。二度、拙宅の近くの日向マラソンに参加されたときは、コース応援者の一人として声援を送ったが、ゼッケンこそシニアナンバーでも、そ

の走りの軽快な伸びやかさと少年のような笑顔の若々しさが鮮烈に印象づけられた。

詩がまた実にいい。一人よがりの難解な表現は皆無であるが、最高のテクニシャンで無駄な言葉は一言一句もない。テーマは多岐に亘るが、そこには常に真実と感動があり、品のよいユーモアがあり、知性と良心が溢れている。私は朝倉さんの詩をずっと詩作の教科書としてきたし、女性の書き手たちの間で、言動、作品共、一番参考になる詩人”としての評価は定着している。

次の詩は、この詩選集には入っていないが、朝倉さんの人柄が端的に現われている傑作としてご紹介したい。

五百円

すみませんが

五百円貸してくれませんか

渋谷の路上で

無精髭の中年男が近づいてきて

おもむるに言うのである
えっ？ と聞き返すと

鸚鵡返しに

すみませんが

五百円貸してくれませんか

貸してくれただって

おれはあんたを知らないよ

とっさに口から出た言葉

男は無言

しばらく歩いて振り返ると

うらめしそうにこつちを見ていた

一年前 この路上で詐欺師に出会った

やあ！ 満面の笑みをたたえて

人混みから手をあげてきた見知らぬ男

どなたでしたっけ？ 思わず訊くと

ほら 佐藤だよ

なぜ 五百円なのだろう

ひもじいのか

空腹と喉の渴きを満たすための

最低限度の五百円なのか……

おれはあんたを知らないよ

切羽詰まった男には

むごすぎる一言ではなかったらうか

重い足取りで

ズボンのポケットを探ると

五百円玉と百円玉と十円玉が

じゃらじゃら鳴った

〔COAL SACK〕64号より

舌を巻く巧みさだ。世相と自分の心理を緬いませながら、状況がリアルな映像となって読者に迫る。登場人物の表情や仕草、果ては臭いまでが鮮烈に伝わり、作者の気持ちや読者の諾いとなって余韻を生む。ブラックにならない仄かなユーモアが、テーマを超えて作品に品位を

どこで会いましたっけ？ 首をひねると
ほら 病院で……

一瞬 妻が入院したときの主治医かと思ひ
畏まって話しているうちに

詐欺師と分かり危うく難を逃れた

三年前 電車の中でいきなり無心された

おじさん 百円ちようだい

おれよりおじさん面した蓬髪男に

にゅっと汚い手を出され

ごく自然に喜捨をした

百円でいいの？

われながら意外な問いに

いいよ！

男は礼の代わりに強烈な臭いを残して

次の車両に移って行つた

それよりも後味悪い今日の出来事

気弱そうな男の丁重な借金申込み

滲ませる。一見気楽に書き流されているように見えるこの詩は、激しい推敲を重ねた果ての、揺るぎのない姿を突きつけてくる。

天性の詩魂と、不断の鍛錬によって確立された朝倉詩の源流、そして床しい人格のルーツをたどるとき、歌と詩が鮮やかに織りなされた形で浮かび上がってくるのが、詩集『フクロウの卵』収録の「寒牡丹」だ。

本詩集八七ページを繙くと、朝倉さんの父上史耕氏の短歌四首を鏤めて、六五行の鎮魂の詩が匂い立つ。

そのいのち咲き極まりて寒牡丹

むらさき深く雪に傾く

雪光に咲きのしづけき寒牡丹

ひたむきなれば涙こぼれつ

寒牡丹降り積む雪に畏れさえ

見せて咲きおり凜然の白

参禅のごとく謔けき寒牡丹
まぼろしめきてほむらだちつ

朝倉史耕氏の短歌のみ引き出してみた。

この四首は、史耕氏の第二歌集『寒牡丹』から引用し
てあり、同歌集の「寒牡丹」の項には、(一月二十一日、
前日前夜降った雪の中に、上野東照宮の牡丹苑を見る)
と前置きして十二首の歌が収録されている。

いずれも品格にみち、色彩感豊かな秀歌で、この項を
歌集のタイトルとしたことから見ても著者の自負が伝
わってくる。朝倉さんは、その中から四首を選び、毎冬
恋人に逢いに行くように、上野東照宮の寒牡丹のもとへ
足を運んだ父の姿を、敬愛を込めて追慕し、詩の中に四
首の歌を抱き寄せていとおしむ。

朝倉史耕氏は、生涯教職に身を捧げ、野榛短歌会編集
委員、選者を務め、日本歌人クラブ会員、『川千鳥』『寒
牡丹』の二冊の歌集を上梓、晩年は俳句にも親しみ、毎
月地元句誌に発表、また美術工芸家としても活躍、金ヶ
崎町史の編纂にも尽力された。

老ひてなほ佳人口紅桜餅

山深く感嘆符のやうなきのこかな

老連翹花芽の緒き気配かな

青すだれ往きつ戻りつ人を恋ふ

そよ風を金銀に分ける猫柳

病葉の地に着くまではやさかな

薔薇咲けば絵心はずむ老ひてなほ

黄せきれいの黄が動きある青田かな

史耕氏の俳句は、際立つ色彩感覚と美への鋭い感性が、
十七文字の小さい器からはみ出さんばかりに瑞々しい宇
宙を輝かせている。

死の五日前まで綴られた、母上の日記抄がまた実に好
ましい。

一日数行ずつの日記には、世の中の事象への関心、聴
いた講演や放送、読書の感想、同居の家族、遠く離れて
暮らしてはいるが替わる替わる訪れたり、電話で状況報
告をしてくる子や孫たちとの交流記録、地域の人々との
ふれあいなどが、簡潔で要領を得た文章で記されている。

歌集『寒牡丹』の口絵カラー写真には、ベレー帽を
被った晩年の史耕氏が、戸外でスケッチブックに絵筆を
走らせている姿があり、温厚で知的な風貌は、そのまま
朝倉さんに引き継がれている。

手元に『寒梅』という上品な装幀の本がある。表紙タ
イトルに副えて「偲ぶ・朝倉二三 ハギノ」と入れら
れている。

朝倉一三とは史耕氏の本名であり、ハギノは朝倉さ
んの母上のことだ。

この本は、平成十年三月に父上の七回忌、母上の一周
忌の法要を行ったとき、五人のお子様方が、父の俳句と
母の日記を抄出して編んだ一〇〇ページ余の遺作集であ
る。口絵写真には六三歳と六二歳時のご両親が、阿蘇の
宿でくつろいでいる和やかな姿がある。父は包容力と風
格を滲ませて微笑み、にこやかな母は知的で明るく美し
い。

寒梅や香こめたる風ひかる
裸木影踏みつつ影のわれが行く

平成六年十二月二日(金) 雨

宏哉から電話あり。じいさんが救急車で病院に運ば
れたのが三年前の今日だった。最後に話をしたのは自
分だったと宏哉は言う。みんな変わりなく真哉はタイ
へ旅行するし、美生はハワイへ行くと言っているとか。
若者は思い切りがいい。

十二月七日(水)

大江健三郎氏がノーベル賞受賞。川端康成氏以来
二十七年ぶりの快挙。長男光さん(三十一歳)の事が
新聞記事になっている。

今日は夫の誕生日でもある。浩紀のガウンを買う。

十二月十二日(月)

ゼットホールへ橋田寿賀子さんの講演会を聴きに行
く。房子さん、のり子さんと三人。タクシーを頼んで
いく。作家なので原稿も見ずに自分の作品の内容など
をすらすら話す。日曜でもないのにホテルいっぱい
人である。よくもこんなに集まったと作家も驚いてお
られた。L15、16、17の三枚座席券。二階だけどゆっ

くりできた。青木隆子さんや佐藤武さんと会場で会った。

平成七年一月十七日(火) 雪

今朝6時半、神戸兵庫を中心としたマグニチュード七の大きな地震があり震源地は淡路島付近とか。一日いっぱい地震のニュースである。被災地の人たちのことを思い一日重い心である。

二月一日(水) 雪

誕生日。本来なれば御馳走でも作ってみんなでお祝いをするところだけれどもそれもできない。神戸の地震のニュースを聞いて涙を流している。一日も早い復興を祈るばかり。瑛子から電話あり。

四月十八日(火) 晴

昭和二十六年四月十八日は我が家の火災記念日。いろいろな思いをし皆様のお世話になって子供を育て、夫が結核になり三ヶ年の療養をしたり、東北大学病院へ入院したり様々な体験をした。平成二年には勲章まで頂き皇居まで宏哉と瑛子に付き添われていつてきた。千葉に泊り、亮子もきて結局九人で祝膳をあげた。思

い出の一つであった。

平成九年三月四日(火) 曇

永岡地区センターの人生大学、第五回の最後の大学だった。村上孝志さんの車でお世話になって出発する。前沢の千田一彦先生のお話あり。八十一歳というのにとても元気で、とても面白い話だった。歩くことが大事だから足を鍛えるように話をされた。これから歩くことに気をつけよう。

この三月四日付の日記は、死の十日前に書かれたものであり、八十九歳にしてこの闊達な精神力に驚かされる。

遺作集『寒梅』の俳句も日記も、共に心を高く持つて充実した人生を生き切った夫婦の魂の証として、第三者である読者の胸に強く迫ってくるものがあり、爽やかな感動を覚える。

日記抄から鮮やかに浮かび上がってくる理想的な母親像、賢く、優しく、温かく、働き者で、気配りの行き届いた、視野の広い、圧倒的な存在感、はからずもそれは、日本の理想的な家族、家庭の在りようを示している。

朝倉家の遠祖から享けつがれてきた、床しい血脈の一つの開花が、“一番参考になる詩人”と評される朝倉宏哉さんなのである。

最後に、この詩選集で最も好きな詩を全文引用して、普遍的な理想の母への手向けとしたい。

ことしのさくら

ことしのさくら
は
八分咲きで雨に降られ
長雨になり
そのまま散つてゆく

さくら並木を
わたしは歩く
傘をさして
あさもひるもよるも

傘をかかげて

空をおおぐと

わたしはたちまち

花びらの仮面をかぶっている

顔だけでなく

頭も肩も胸も

花におおわれる

わたしは

先月みまかった

母を思う

母は

いつものように夕食を摂り

いつものように入浴し

いつものように床に入り

臨終をむかえた

それは日頃

母が冀っていた死に方だった

だから
母のデスマスクに
ほんのりと微笑があった
永遠の微笑だった
その母を花でかざった
さくらの花の下は
雨の日でもあかるい
あさもひるもよるも
わたしは花びらを浴びる
ことしのさくらは
かなしいほどうつくしい

朝倉宏哉・初期詩集を読む

相沢史郎

朝倉宏哉の詩を理解する鍵は、彼の郷土である岩手をふくむ北東北の風土と民俗つまり文化を知ることが肝要である。それは岩手出身の石川啄木や宮沢賢治を理解することと同じである。北東北出身の詩人は、避けがたくその風土に結びつくという宿命は、近代以後の日本文学の宿命ともいえるようだ。

NHKに勤務していた朝倉宏哉は、第一詩集『盲導犬』（一九七三年）を発行した年に、東京から郷里岩手の盛岡局に転動した。郷里岩手といっても、四国に近い面積をもつ岩手は手のつけようがなく広大だ。県の北半分は旧南部藩領の寒冷な準高原地帯で、戦後までは米の飯は貴重なもので、かつて出征した兵士は兵舎で食う米の飯のうまさに涙を流したといわれるほどの地帯である。

それに比較して朝倉の出身地である県南地帯は、やや温暖な旧仙台藩領の穀倉地帯で、古代から開発されて古い文化が蓄積された地帯である。

その転勤の時の手紙に「九月よりUターン現象にならったわけではありませんが、郷里に帰っております。NHK放送部勤務という立場からも、岩手を目で見る機会も多く、風土・風俗というテーマについても考えるところ沢山です。当然、今後生まれでる詩作品にも何らかの変貌がみられると思っております」と書いている。

だが郷里岩手に帰る以前から、この北方性は詩人の中にしたたかに温存されていた。

ほう

ほお

ほう

ほお

馬まつこ 逃げだどお

馬まつこ 逃げだどお

その仄暗い馬小屋でうまれ
そこで老いた

柔順な栗毛の牝馬

その母もその母の母もそこで逝った

遠い血統の愛着も捨てて

ほたるとかえるの夜の中へ

馬は

あらあらしく逃げて行つた

(馬)

馬は北東北とは離すことができない北方的な動物である。多くの民話や伝説の中でも、馬と人間は運命共同体をなしていた。だが、いまは馬はいない。だから詩の中の馬は逃げだしたのである。暗澹として、この詩人は馬の逃亡を見ているだけである。この逃亡した馬は、つづく詩集群『満月の馬』には『満月の馬』、『獅子座流星群』では「馬」、『乳粥』では「勝山号」などに転身し、初期から一貫して朝倉詩のひとつの象徴にもなっている。この他にも「きつね」「三陸沿岸大火」「千の日と夜」「お

画として、次なるカメラの眼を待つばかりであった。

それから丁度十年後、朝倉宏哉は再び東京に転動しているが、盛岡在任の時に詩誌『火山弾』や『化外』その他に発表した作品を集めて第二詩集『カッコーが吃つている』(一九八三年)を発刊した。

この詩集でも、「四人の人夫」「根岬の梯子」「槻沢鬼剣舞」「右耳のつぶれた男」などの作品に込められているのは、民俗への濃厚な北方的感情といえるものである。この感情の變は、弥生式に均整のとれたものではなく、縄文火焰土器のように複雑にめくれ上がって波うつている。中でも「四人の人夫」の壮絶な始原の姿は、テレビ・ディレクターの眼を通して縄文的儀式を彷彿とさせる表現となっている。

一人が虻に身構える
ぐるぐるの虻に向つて身構える
ぐるぐるの虻に身構える
ぐるぐるの虻に身構える
何千年変わらぬ海猫ウミネコの声がする

いとま」などは、北方的風土性の濃厚な作品だが、この詩人の詩的出発の決意を断定的に言い切った詩行は、すでにこの第一詩集の「千の日と夜」にみられる。

岩手内陸の千の民話か

おれの千の内臓を果実のようにつくつてゆき

つくりおえた時

曾祖母は死んだ

おれは母と祖母と

まだうまれないおれの娘と

あおい大きな漆の樹の下に

言葉のない曾祖母を土葬し

千一回目の原色の朝をむかえた

(千の日と夜)

当然のことだが、この詩には「おれ」という主語が使われている。他の詩にみられる甘ったれた「ぼく」ではない。千の民話をどっこいと背負ったすがすがしい「おれ」の出發であり、それらの民話はすでに内蔵された陰

一人が虻に呪文する

民譚を語る節して呪文する

蛇紋山地の這い松林

開鑿工事の四人の人夫

一人は女 三人は男

(四人の人夫)

虻を殺す行為は、土器に虻を掘り刻む行為と同じで、縄文的祈りだと思ふ。祈りの呪文も民話を語る行為と重なり、その背景は蛇紋山地の海岸の絶壁。神楽舞台が整い過ぎたきらいがあるが、これぞまさしく現実であり、総掛かりで虻を殺した四人には、もうあつげらんかんと昼飯時が近いのだ。エーゲ海の貧しい島に住むギリシアの神々のようだ。

私はとくにこの四人の数を問題にしたい。現実的にはドキュメンタリー・タッチにも見え、この詩人はそれを詩的に表現したに過ぎないのかもしれないが、四人は原始的共同体の在り方を示唆しているとみたい。つまり、呪術師(詩では女)・頭領(同・男)・戦士(同・男)・

道化師（同・男）からなる最少人数の狩人が、共同体の原形をなしているという。かつてテレビで見たブッシュマンの狩獵も、四人が一組になって行動していたが、詳細な説明は省略するが、この説には納得する（W・トンブソン）。日本の神楽やギリシア演劇の原形も、この四人一組説を視野に入れて考えてもよい。つまり「四人の夫婦」は、かなり郷土芸能の神楽を暗示するもので、衣装や面を外した神々の行為に近い演技とみてもよい。現実の工事人夫は神々になり、あるいは村の祭祀には神楽に出演するのもかもしれない。「民俗」芸能とはそのようなことをいうし、そのまま過去に遡ってもよい。

北の民俗にたいするドキュメンタリー手法は、職業柄といたいたいほどの複眼的多角性をもったイメージを展開する。とくに民俗芸能を捉えるときは優れて鋭い。とくに「槻沢鬼剣舞」や「根岬の梯子」では、芸能そのものの表現から詩を探るのではなく、芸能の踊り手の顔をクローズ・アップすることで、そこにある北の生活の実態を炙り出すという方法が各所にみられる。これはメディアアの手法なのだろうが、この詩人の想像力はさらに深く

る。華やかなステージに登場する民俗芸能は、もうかつてのエネルギーを失って人寄せショーに墮ちてしまった。現実はそのようであっても、この詩の老農夫は

「有形のものは 失くしても

作れば 元さ戻るとも

無形のを 失くしたら

絶対 元さ 戻らねエ」

（「槻沢鬼剣舞」）

と伝えられない苛立ちを抑えながら、若者の消えた集會場で、一人鬼剣舞を踊る。人も村も幻のように消えて、リズムだけが夜の闇に残るだけである。この詩はたしかにリズムだけを残している。同じような民俗のリズムは、「根岬の梯子」の「虎舞」にも鳴り響いている。

娘らは太鼓

老漁夫は笛

二匹のとははすると梯子をのぼり

決りこんでいく。

へおれは異国のひとり者

岩に生え藤たよりなし

帰命長来花和讃

花のようなる子をもつて

子は家を捨て親を捨て

瘦地に唾吐き捨てて

街の阿修羅の仲間入り

祭りは廃れ墓は荒れ

怒りのしわとしわぶきで

夜の愁いを吹きとばし

（「槻沢鬼剣舞」）

芸能のリズムがそのまま詩のリズムになって、消えていく村の民俗や取り残された老人の苦衷を綴っていく。踊り手はもう若者ではなく、残された老人たちである。宮沢賢治の「原体剣舞連」に溢れていた「ぎったぎった」した縄文のエネルギーは、もう死にかかっている

（生まれた時から 海猫が騒ぎ 難破があり 豊漁
があり 津波があり 梯子が流れ また作り）

（「根岬の梯子」）

このリズムは不思議な哀調を帯びた里唄のようにも聞こえ、消えていくものへの挽歌のように、波と海猫の声にかき消されていく。

一転してレンズの眼は、「恐山にて」に向かうと、生者のワルブルギスの昼となる。死んだ愛犬が地獄の一目で供物の残飯を漁り、霊を観光にきた生きた亡者たちは、トランジスター・ラジオから聞こえる日本シリーズに喚声をあげている。みんな燃えろ、燃えろと亡者たちも地獄から叫びたい光景だ。東北では、極楽浄土といえど平泉の金色堂、地獄といえど恐山。何がなにやらさっぱり分からないお説教と信心深い観光客。カメラの眼はいきなり解説なしにこの映像を刻みこむ。

民俗への眼の決定的な作品は「右耳のつぶれた男」である。副題のように「イーハトーヴォ幻想」かもしれない

いが、北東北という男の肖像画である。この男の顔は、まさにイーハトーヴォの地勢・気候・歴史・民俗であり、北方の名もない人々の精神史である。

その相貌は荒れに荒れて神に近づく。いつの時代にも中央権力に狙われ、この「いま」も勇猛な兵士になり、ものいわぬ出稼ぎになり、森は伐られ、山は削られ、田は荒れ果てて、片耳の男は壮絶な彫りを深くして神に近づく。これは骨太な認識の詩であり、この脆弱な解説の域を越えた作品といえる。この詩のヴァリエーションは後期の詩群にも現れ、中でも「仰向け男」（未収録詩篇Ⅲ）は、その最たるものと思う。

朝倉詩の初期作品群のもうひとつの特徴は、自然の中に自己投入するが、決して観察に陥らない知的な距離を保つ精神である。あるいは叙情ではあるが、叙情に溺れないアイロニーが覗いてるとみるべきか、逆にアイロニーが叙情を生み出しているとすべきか、不思議なバランスを保った作品群が多い。植物・昆虫・鳥・小動物など多くの生物が現れるが、その生命が痛々しいほど実存

の不安を揺さぶる。食べるカッコウの声は何を告げるのか。

突然の変調

突然の喘息

突然の狂気

突然の陥穽

闇にひそむ見えない刃物に

鋭く切られ

声がちぎれる

夢がちらばる

（「カッコウが吃っている」）

世界を押し潰すような何かただならぬ事態が迫っている。断末魔のようなカッコウの声は初夏を告げるのではなく、危機をつけているのかもしれない。カッコウの鳴き声はやがて不気味で不吉な影になり、生きることへの不安をかきたてる。「五つの子のための五つのメルヘン」「冬の小さな林」などの、寂しくなるような優しさの表現の背後に、「あおざめた」痛々しさ、傷ついた神経が

隠されているようにもみえる。かつてそれは悲傷ともいわれ時代の苦しみとされた。鳥や虫、小動物や子供、小さいものたちの「生きる」ことへのいとおしさのために、傷つくほど心をいためて大きな栗の木の下に、生の花粉にまみれて蹲ってしまう。また、「ツキヒホーシ」と鳴くイカルの声に、民話的感性を促されて感動し、遙かに飛来する白鳥に少年のように眼を輝かしている。北方人は誰も白鳥の飛来を待っているし、その北帰行をまた帰ってくるのを祈りながら見送るのである。再び東京に帰る頃の手紙に「何か大切なものをどこかに置いて遠くまで来てしまった思いにさいなまれます」とあった。

巻を挙げて解説の終りとしたい。

（中略）セネガルから プラジルから

ラスコーの洞窟からも タッシリ・ナジェールの岩場

からも

牛は続々と集まってくる

世界じゅうの

さまざまな貌の いろいろな色の牛が

広場にあふれる

牛は啼く 泪をためて

大合唱が北上山地のたけなわの秋を

ゆさぶっている

（「牛祭り」）

『フクロウの卵』（一九九四年）以後の詩集には、カメラの眼は世界へと広がる。アジア・アフリカ・中南米と歩き回るが、ニューヨーク・ロンドン・パリは詩に現れない。それまでたえず北方を凝視していた眼は、華やかな都市には眼もくれない。そして絶えず人間と共生する動物たちを凝視して、日本の北方と重ね合わせる。その方法は一貫して「もの」に語らせている。最後にその圧